

メッセージアウトライン 創世記30:25～43「苦闘の中での繁栄Ⅱ」

[25-26]「ラケルがヨセフを産んだころ、ヤコブはラバンに言った。『私を去らせて、故郷の地へ帰らせてください。妻たちや子どもたちを私に下さい。彼女たちのために私はあなたに仕えてきました。行かせてください。あなたに仕えた私の働きは、あなたがよくご存じなのですから。』」

ここまでですでにラバンのもとに来てから14年がたっていると思われる。ヤコブはレアのために7年、ラケルのために7年働いた。→29:18,27 本来ならばこれでヤコブは故郷のカナンの地へ帰れるはずである。

しかし、ヤコブが家族を伴って出ていくためにはラバンの許可が必要であった。ヤコブはラバンと養子縁組による親子関係に条件づけられており、ヤコブはラバンが死ぬまでは独立の財産が所有できず、そのために特例として妻や子どもたちを与えてくれるように願ったのであろう。

[27]「ラバンは彼に言った『私の願いをあなたがかなえてくれるなら——。あなたのおかげで主が私を祝福してくださったことを、私は占いで知っている。』」

この「——」の部分には「とどまってほしい」ということばが入るものと思われる。ヤコブが去るのを喜ばないラバンの態度はヤコブの存在がラバンに繁栄をもたらしたことを知っているからである。

「占いで知っている」ラバンの信仰はアブラハム、イサク、ヤコブのような正しい信仰ではなく、いろいろな宗教を混ぜ合わせた混合宗教から来る信仰であったようである。

[28]「さらに言った。『あなたの報酬をはっきりと申し出てくれ。私はそれを払おう。』」

ラバンはヤコブが去るのを望まず、この問題を物質的報酬を与えることで解決しようとした。

[29-30]「ヤコブは彼に言った。『私がどのようにあなたに仕え、また、あなたの家畜が私のもとでどのようにであったかは、あなたご自身がよくご存じです。私が来る前は、あなたの財産はわずかでしたが、増えて多くなりました。私の行く先々で主があなたを祝福されたからです。いったいいつになったら私は自分の家を持てるのですか。』」

「あなたご自身がよくご存じです」これは、私がどれほどあなたに忠実に使えたか、それに対してあなたがどのように報いるべきか、私に聞かなくても、あなたのほうがよくわかっているはずですの意。

ラバンは長い間ヤコブの貢献を評価しなかったようである。それでヤコブはここで率直に自分の存在により神に祝福された豊かな実績を強調する。しかし、ヤコブの不満はそれにもかかわらず、働いても働いても奴隷同然の地位から解放されず、自分の家を持っていないことであった。

[31]「彼は言った。『あなたに何をあげようか』」ラバンはヤコブの主張を認めざるを得

ないが、しかしここでもやはり物質的なもので決着をつけようとする。「ヤコブは言った『何も下さるには及びません』」このことばは、約束しても後でどうなるかわからないというラバンへの不信感と警戒感の現われ。「もし私に次のことをしてくださるなら、私は再びあなたの群れを飼って守りましょう」ヤコブはここで着実に実績を積み上げてラバンの手には乗らないようにする。そのため彼は一つの条件を付けてさらにラバンのもとにとどまることに同意する。もちろんこれは死ぬまでにとどまるということではない。[32-33]「私は今日、あなたの群れをみな見て回しましょう。その中から、ぶち毛と斑毛まだらげの羊をすべて、子羊の中では黒毛くろげのものをすべて、やぎの中では斑毛まだらげとぶち毛のものを取り分けて、それらをわたしの報酬にしてください。後であなたが私の報酬を見に来られたとき、私の正しさが証明されるでしょう。やぎの中に、ぶち毛や斑毛まだらげでないものや、子羊の中に、黒毛くろげでないものがあれば、それはすべて、私が盗んだことになります」

ヤコブの要求は、この地方では羊は白、やぎは黒いのが普通であって、黒い羊や、ぶち毛まだらげや斑毛まだらげの羊ややぎは例外で少ないという事実に基づいている。それで、ラバンにとってヤコブに与えなければならない群れは小さく、しかも働き手のヤコブを失うことはない。万事好都合だと感じたことであろう。

[34]「するとラバンは言った。『よろしい。あなたの言うとおりになればよいが。』」

このようにラバンはヤコブの提案に一応同意をする。

[35-36]「ラバンはその日、縞毛しまげと斑毛まだらげの雄やぎと、ぶち毛まだらげと斑毛まだらげの雌やぎのすべて、すなわち身に白いところのあるもののすべて、それに、黒毛くろげの子羊のすべてを取りのけて、息子たちの手に渡した。そして、自分とヤコブの間に三日の距離を置いた。ヤコブはラバンの残りの群れを飼った」

ラバンは自らの群れのところへ行き、ヤコブの言った条件に該当するやぎと羊を取り分けた。このことをヤコブに任せないで自分でやったということは、彼の疑り深い性格のゆえであろう。さらに彼はこのヤコブのものとなる群れをヤコブには任せないで自分の息子たちにゆだねたのである。そしてヤコブにはラバンの残りの群れを飼わせ、自分とヤコブとの間に三日の道のりの距離を置いた。これは簡単に行き来ができず、群れが混じることを防ぐ手段であった。ラバンはこのように何重にもヤコブに対して不利な条件をもうけたのである。

[37-39]「ヤコブは、ポプラや、アーモンドや、すずかけの木の若枝を取り、それらの白い筋の皮を剥いで、若枝の白いところをむき出しにし、皮を剥いだ枝を、群れが水を飲みに来る水溜めの水ぶねの中に、群れと差し向かいに置いた。それで群れのやぎたちは、水を飲みに来たとき、さかりがついた。こうして羊ややぎは枝の前で交尾し、縞毛しまげ、ぶち毛まだらげ、斑毛まだらげのものを産んだ」

人間的に見ればラバンの自己中心的なやり方にヤコブは怒り、また意気消沈してしまうところであるが、彼にはアブラハム、イサクと同様に、神が共におられ、神の祝福があった。ヤコブが取った方法は古代社会でかなり広く信じられていた考え方に基づくも

ので、産前の母親の視覚からの印象が生まれてくる子に影響するというものである。もちろん、神の超自然的な働きがなければ何も起こりえない。

別人が形だけまねても同じことが起こることはない。

[40-42]「ヤコブは羊を分けて、その群れが、ラバンの群れの縞毛しまげのものとすべての黒毛くろげのものに、向かい合わせになるようにした。彼は自分の群れを別にまとめておき、ラバンの群れと一緒にしなかった。また、強い群れに盛りがついたときに、ヤコブはいつも、あの枝を水ぶねの中に、群れの目の前になるように置き、枝のところで交尾させた。しかし、弱い群れのときには、それを置かなかった。こうして、弱いものはラバンのものとなり、強いものはヤコブのものとなった」

ヤコブの取った方法は白く皮を剥いだポプラやアーモンド、すずかけの木の若枝を群れが水を飲みに来る水ぶねの中に差し向かいに置いて、その結果、さかりがついた群れの羊ややぎが縞毛しまげ、ぶち毛、斑毛まだらげのものを産むという方法であり、またラバンが息子たちにゆだねた羊の群れの縞毛しまげと黒毛くろげのものに自分の羊の群れを水ぶねに向かい合わせに置き、同様に混色のものを産ませるという方法であった。さらに群れの強いものの交尾にだけ木の枝を用い、弱い群れのときにはそのようにせず、数だけではなく質的にも最良のものを得ようとした。こうして弱いものはラバンのものとなり、強いものはヤコブのものとなった。

ヤコブのこのような方法は科学的には何の根拠もないものであったが、神はそのようなことを通しても彼のために最善をなされるのである。ヤコブの成功は、その方法のゆえではなく、あくまでも神ご自身の摂理による干渉の結果であった。

[43]「このようにして、この人は大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、それにらくだとろばを持つようになった」

群れが多くなれば、当然その世話のために多くの人手が必要となる。またらくだやろばは商売で荷物を運ぶために貴重な存在で、ヤコブはこれらのものも持つようになったのである。このようにして彼は神の祝福によって自分のためにたくさんの財産を持つようになった。

ヤコブは様々な欠けを持った人物であり、父や兄をだまして神の祝福を手に入れようとした。しかし、そのような彼を神は生まれる前から選び、アブラハム、イサクに連なる祝福の契約に入れてくださったのである。まいた種は刈り取らなければならないが、彼はラバンのもとで欺かれ、苦しみの長い期間を過ごさなければならなかったが、主は彼と共におられ、彼を祝福し、さまざまな過ちのうちにも多くの家族と多くの家畜の群れ、男女の奴隷をもつようになったのである。

このようにしてラバンのもとでヤコブは苦闘しながら繁栄していく。そしてこのヤコブの子どもたちが後のイスラエル民族を形成し、そこからやがて救い主イエス・キリストがこの世に来られることになるのである。神は罪人やさまざまな過ちを犯した人物をあえて用いてご自分のご計画を進められる。そのような人々に必要なのは神の恵みなの

である。私たちもさまざまな罪を犯し、過ちを重ねる者であるが神はそのような私たちを見放さず、愛して、イエス・キリストにあって救いに入れ、祝福を与えてくださる。これは私たちの努力の結果ではなく、神の恵みなのである。それゆえ、私たちのなすべきことは私たちを愛し、祝福を与え、罪と死と滅びから救ってくださるイエス・キリストを救い主として心から信じ、従い続けることである。また、このことを覚え、私たちは心から主に感謝し、賛美する者になりたい。→エペソ1:3~6、2:1~6